

大平先生を深くしのんで

廖 承 志

一九八〇年六月十二日、私がちょうど海外で病のため静養していた時、突然「日本国総理大臣大平正芳逝く」との凶報に接し、悲痛きわまりないものがありました。私は、中国は一人の良き友人を、日本は一人の大政治家を失ってしまったという切々たる思いにとらわれました。

私は大平正芳先生に生前、何度もお目にかかったことがあります。一九七二年九月、田中内閣が誕生して三ヶ月に満たない頃、先生は外相として、田中総理と共に中国を訪れ、画期的な意義を持つ日中共同声明の交渉に当たるとともに、これに署名し、日中国交正常化を重々しく宣言して、日本と台湾との間の「外交関係」を断ち切られたのであります。これが私と大平正芳先生との最初の出会いでありました。先生の先見の明とすぐれた見識、しつかりとした胆つ玉と誠実で素朴でなじみやすい風貌に、私は大変深い感銘を受けました。私達は初対面でありながらも、昔なじみさながらの思いを抱き、すぐに良い友達となりました。一九七四年一月、先生は再び中国を訪れ、日中航空協定の交渉に当たるとともに、日中貿易協定に署名されました。これが私達の北京での再会であります。大平正芳先生とは東京でも何度かお会いいたしました。一九七三年、私が中日友好協会の代表団を率いて訪日した際、また、一九七八年、私が鄧小平副総理に随って日本を訪れた際、さらには一九七九年、中日友好の船で訪日した際等、その度に先生にお会いしておもてなしを受けたものであります。ある時は総理官邸で、ある時は日本料理の店で、私達は額を寄せて言葉をかわし、旧交を温ためあいました。

一昨年末、大平正芳総理は、中国政府の要請に応えてわが国を公式訪問されました。私はこの時尊敬することの古くからの友人と再会し、共に友情を語りあうことができたらとどんなに思い願ったことでありましょう。しかしながら、いかんせん病魔が私の身にとりついて、面会は医者の禁するところとなり、ついにお目にかかることを得ませんでした。まことに痛恨の一事であります。まだ覚えておりますが、昨年の春、成田空港近くのそれほど大きくないホテルで、私は大平総理およびその他の友達から送られた花を受け取りました。これが思いもかけない永の別れになるうとは、万が一にも予期せざることであります。

大平正芳先生は生前、日中関係発展のために尽力をされました。先生が両国国交を回復するために尽された貢献は、歴史的なものであって、決して、その価値は磨滅してしまふことはありません。福田内閣時代において、先生は自民党の主要な指導者の一人として日中平和友好条約の締結に積極的な支持を与え、その推進をはかられました。大平先生が総理大臣になられてからは、日中両国の友好協力関係は長足の発展を遂げました。一昨年末訪中された時、先生ははっきり明確に「日中関係を深さと広がり求めつつ推進するために努力する」というスローガンを提起されました。先生は両国民の長きに亙る友好往来と各方面での交流が両国の国家関係の発展を促進させる上で果してきた大きな役割に対して高い評価を与え、これを熱烈に支持されたのであります。

歴史はきつと公平な評価を下してくれるであります。大平正芳先生が日中友好のために樹立された功績は必ずや歴史の書物に掲載され、永遠に両国人民の誉め讃えるところとなるであります。人民のために尽されたその貢献によって、人民は先生を決して忘れ去ることがないであります。大平正芳先生は私達の心の中で永遠に生き続けるであります。先生の精神こそは決して滅びることのない永久のものなのであります。

(中華人民共和国全国人民代表大会副委員長・中日友好协会会长)